

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

●9年目、33号を迎えるマガジン。こんなに続くとは思わなかった、なんてことはない。だからといって、五十名余りの執筆者、いよいよ300頁を超える雑誌を年四回、定期刊行できる確信があったわけでもない。これは執筆者の皆さんのおかげだ。

そして又、今号から、新たに三人の強力な執筆者と復活者1名を迎えた。中味が勝負だ！と私が勝手にいつも言っているように、私達の時代の大切なテーマが、次々連載テーマとして取り上げられ、登場していると思う。

私達の社会は何が起きるか分らないし、自分たちに何が出来るかも簡単には分らない。ネガティブ派、ポジティブ派、どちらも具体的な未来を知ってはいない。ただ、結果も成果も、思索も含め行動した蓄積の場にしか生まれない。

そういう意味で、口先だけのポジやネガは、大したことではない。近年、口先評論家や140文字批評家を持ち上げる輩が多いのは、自分が怠け者になって汗をかかないからだ。人を肯定しているのではなく、自分をそうしているのだ。私はそんなゴタクを言っていないで、連載発信してご覧なさい！とメッセージし続けてきたつもりだ。

その結果、大きくはないが様々な影響が、執筆者の皆さん自身の人生にも、世の中にも生まれている。この先、何が起きるかなど誰にも予言できるはずがない。ただ、何かが起きる事が多いのはどんな場所かを編集長は知っているつもりだ。

●九年目が始まり、私の身の上も転換期を迎えた。何事も変化する。それがクリエイティブに動くように、これからもマガジンをマネージメントしていくつもりだ。連載者の一人、竹中尚文さんの本が出版された。本誌に連載されていたものだ。ぜひ、あらためて読んでいただくと嬉しい。

●気をつけてはいるが、早速ミス発見。頁ナンバーだ。発熱中に急いで処理しようとした結果かも。起きないようにとは思いますが、起きてしまったものは仕方がない。それで済ませる。気にしすぎると全体のモチベーションに関わってくる。

### 編集員(チバ アキオ)

★元少年ジャンプの編集長で、白泉社の社長、鳥嶋和彦氏のインタビューに触れる機会があった。「原稿を仕上げるのがはやい人と遅い人がいます。それは何の違いかというと決断力があるかないか。あきらめることができるか、できないか。

違う言い方をすると時間をかけるとよいものが書けると言う

人が遅い人。もっとよくなるんじゃないかと思う。そういう人と言うんです。週刊なので、面白くても一週間、つまらなくても一週間。なので、つまらないものが続かない限りは大丈夫。次の回で挽回すればいいと。全部の試合に勝とうと思ったら間違いで、大きな流れをいれておく。それがプロの漫画家であることだ」と話していたように思う。「逆にいうと、今連載がいい状態であれば後は下がることになる。下がっても、また上げたい」とも。★少年ジャンプと対人援助学マガジンは同じではない。それでも連載ということは共通する。ドクター・スランプ、ドラゴンボール、ワン・ピース、ドラゴン・クエストなどのカルチャーを産み出した鳥嶋氏(別名:ドクター・マシリト)の言葉は響く。33号連載、編集した経験が私に膝を打たせる。★短信に書いたが今回、団遊さんのサポートで、宮城、福島を訪れた。7年後の状態は、住民生活にも、震災遺構にも大きな差を産み出しているように思えてならない。住民の生活は継続する。それを編集したり、あきらめたりすることはできない。編集しきれなかったこと、掲載できなかったこと、毎日の姿を見せる。それがこの対人援助学マガジンの機能であろう。★個々の連載に関する話では氏の話はよくわかる。リアルなドクター・マシリトにうん十年ぶりに出会えて、ドクター・スランプ好きには衝撃的な経験であった。原稿に「ボツ…」という編集者のイメージを作ったのはあの漫画ではないか。そんな単純な仕事ではないことは今ではわかる。育てるという話を情熱的に語る鳥嶋氏は今、出版社を、その社員を、少年たち、元少年たちの文化をまだまだ育てる気である。われわれ、編集部も継続である。

### 編集員(オオタニ タカシ)

以前、マガジンの執筆者の方から、過去の掲載分について修正したい旨の希望があり、編集会議でその対応を協議したことがあった。自分の事として思っても、細かな誤字も含めて、直せるものなら直したいと思う気持ちが出てくる部分があるのは、自然のことだと思う。この時の結論では、最新号に修正について説明を加える形をとることとし、過去の掲載分自体の修正は行わないことに決まった。理由は大小色々あったが、マガジンに書かれていることは、執筆した時点での理解や知識、考えによって書かれたものであり、修正が必要な点や不足がある場合も起こりうるが、そのことは、経過も含めて残す方がよいだろうという判断であった。これは、非常に重要なことだと思う。

私が従事している発達支援の領域でも、ほんの数十年前には、現在ではおよそ妥当性があるとは思えない支援方法が行われている時期があった。そのように書かれている専門書もあるので、当時の認識が今でも確認できると言える。このこと

には2つの意義があると思う。一つは、過去の間違いや誤解・失敗を、事実として残しておくこと。そして、もう一つは、現時点で「正しい」とされていることであっても妄信しない、という意識を与えてくれることである。失敗したことは、挽回はできても、その事実自体を取り消すことはできない。だから、私たちにできることは、失敗とどう向き合い、そこか何を紡いでいくかだけである。隠滅、改竄の無様さは自明であるが、見たいものしか見ないというムードも、省みる必要があるかもしれない。本誌の50本超の連載は、必ずしも光の当たってきたテーマばかりではなく、都合のよい理想論やべき論だけが示されたものではない。ひたすらに、現実である。この時勢の中、不誠実に勝るのは、やはり地味でも誠実な一歩一歩しかない。マガジンの編集は、さまざまな地域や領域で、その確実な一歩を歩んでおられる方がおられることが感じられる、本当にありがたい機会です。

## ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は  
[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

### マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8  
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

## 対人援助学マガジン

### 通巻33号

第9巻 第一号

2018年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第34号は2018年9月15日  
発刊の予定です。

原稿締切2018年8月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありませ

ん。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない分野、様々な立場の方達の対人援助領域からの積極的発信を期待します。

## 対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内  
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

## 対人援助学会事務担当

### 入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1  
リファレンス内  
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

このイラストは、マガジン連載執筆者の一人、古川秀明さんが制作したCDジャケット用に描いたものだ。

何枚目になるのか、最初から全部私が描いてきた。彼はシンガー・ソング・カウンセラーなる造語で自分を紹介しているが、「音」「楽」を文字通り体現している。

私も漫画家として、マンガに何が出来るだろうかを考えるのが好きだ。マーケット進出の手段に陥りがちな創作物ではなく、描き続けることに意味があるものにする模索を続けてきた。

最近、その意味が少し見えてくる経験をしている。たぶん古川さんも、PTAの講演会などの第二部ライブで歌いながら、そんなものを見いだしているのではないかと思う。

(2018/06/15)